10周年記念会を振り返って

開院10周年記念会（於：晴海ターミナルホール）

開院10周年記念功労者表彰式（於：入院棟8階食堂）

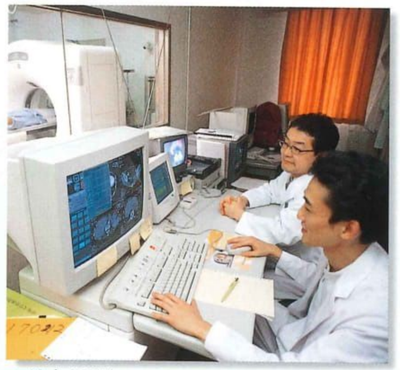
豊洲病院の今日

外来受付

中央検査室

調剤室

教授回診


ヘリカルCT

カンファレンス風景

外来診察

手術室

看護の日

公開講座

消防訓練

とよす20年
昭和大学附属豊洲病院

外　科

二十周年記念誌に当外科の紹介をすることは、つまり当外科も発足以来20年を迎えたということになる。初代教授（医長）の安井昭先生はカリスマ性をお持ちの方で黙っていても周りの人が動くという存在であった。同教授（病院長）が平成８年３月退任され今二代目の時代に移っているが、古今東西二代目は重要な役回りで、より発展させるも壊すもここにかかっているというところである。十周年記念誌発刊の頃（平成４～５年）の陣容は安井　昭教授（平成５年４月～８年３月病院長）、西田佳昭助教授、熊谷一秀助教授、清水浩二講師、吉利彰洋助手、増尾光樹助手、山形健一員外助手ほか１～２名の旗の台第二外科からの員外助手で構成されていた。当時助手以上のスタッフは６名であったが安井教授退任時５名に、西田助教授退任時（平成９年３月）４名に減ぜられた。昭和大学全体のリストラ施策の中、不満も多いにあったが外科体制を守り、創造するためスタッフ個々が自覚を持ち活動することで難局を乗り切ってきたように思う。この間、助手は山形健一、田中孝幸、横山　登（旗の台第二外科）の各先生が入れ替わり、島田恵太、田崎秀和の二名が研修医として入局している。旗の台第二外科からは員外助手として保田尚邦、小池康、吉澤太人、上田和光、橋本行弘、神山剛一、長山裕之、丸森健司、川口哲也、大堀真毅、牧田英俊、金原朋子、田嶋勇介、成田和広などの多くの先生方の御世話になった。平成10年４月熊谷一秀が教授に昇任、同時期には当院に乳癌検診治療センターが発足し冨永建客員教授が外科部門の中の乳癌の診断、治療、化学療法を担当しており、平成11年隅田周司員外助手、平成12年黒井克昌助教授が乳腺診療班として赴任し現在に至っている。平成９年４月にはそれまで旗の台の泌尿器科から非常勤で外来（泌尿器科）応援にきてもらっていた斎藤豊彦助教授が正式に当外科の助教授（泌尿器担当）として着任し、平成11年には内田博仁員外助手が外科研修をかねての泌尿器科医員として赴任し協力をいただいた。誌面をお借りして旗の台の第二外科、泌尿器科には感謝の気持をささげたいと思う。平成

泌尿器科外来診察

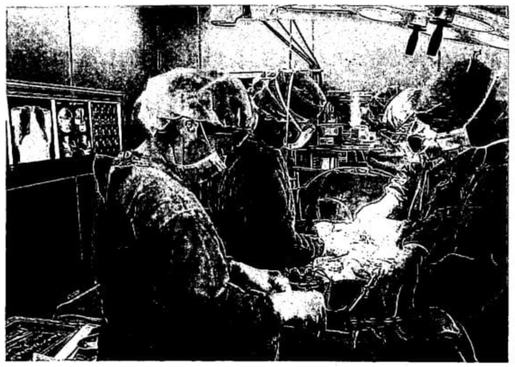
14年４月の現有スタッフは熊谷一秀教授、冨永　建乳癌検診治療センター長（第１回乳癌学会会長、乳癌治療の大御所）、斎藤豊彦助教授（泌尿器科担当、医局員の兄貴分的存在、大所高所から意見を言える立場で医局のまとめ役）、清水浩二助教授（主に腹腔鏡外科を担当、まじめでやや頑固なところもあるがアルコールが入ると傾眠傾向に至る）、黒井克昌助教授（乳腺担当、今後は表に立って広い活躍が望まれる）、増尾光樹講師（長い出張から帰局、本当の勝負はこれから？）、横山　登助手（医局の若頭、今後は自分の専門領域で世に出るはず）、相田貞継員外助手（まじめでややおとなしすぎるが酒で豹変の噂？）で構成され、西田佳昭兼任講師（前助教授、現在も木曜の外来を担当いただき、当外科の同門会組織である七豊会の開催でも大変お世話になっている）、田中孝幸兼任講師（前医局長、コツコツ仕事をするタイプで医局への貢献度は高かった）、ほか５名の兼任講師の先生方には直接に間接に診療、研究に協力をいただいている。さらにもう少し研修医を含めた若い力がほしいところである。

１．診療体制

一般外来診療は午前の二診体制を基本とし、加えて平成13年から火曜午後に大腸肛門外来（横山助手）を開いている。近い将来外科外来は一般外科外来、消化器外科外来（臓器別）、内視鏡（腹腔鏡）外科外来などと分けたいと考えている。泌尿器科外来（月～土）は斎藤助教授が泌尿器疾患の初診、再診診療を行っている。外科の中の泌尿器外来という体制をとっているが、実際には泌尿器疾患全般（排尿障害、尿失禁、前立腺肥大、インポテンツ、尿路結石、泌尿器系悪性腫瘍、その他）の要望に十分耐えうる診療を行っている。乳腺外来は月、水、木曜の午後、土曜の午前で専門外来を担当している。脳神経外科外来、皮膚科外来は変わることなく旗の台の大学附属病院の全面的な協力で行われている。入院診療体制は外科担当病床は30-35床であるが、平成９年頃からの乳腺疾患、泌尿器疾患の増加によりかなり汲々とした運営を強いられているのが現状である。手術は平成３～４年は手術総数240例、全麻下手術170例が年々増加し近年は手術総数は400例を越え、全麻下手術も240例を数えるようになったが、今後はスタッフ、病床の増加を可能にするべく努力を重ねたいと考えている。手術内容は消化器癌手術が中心となるが、近年は胆道系の腹腔鏡手術に加え大腸癌、胃癌、粘膜下腫瘍、副腎、虫垂炎、鼠径ヘルニア、脾臓など多岐にわたって腹腔鏡手術が行われており、近い将来には手術例の５割以上を腹腔鏡で行う日も来るかという勢いである。乳腺、泌尿器も悪性疾患を中心に手術例は年々増加している。特に乳癌は患者さんのニーズに応えるべく乳房温存術式を選び積極的に採用している。

消化器癌の治療は当外科の中心をなすものであり、消化器科との交流の元に外科医自らが消化器癌のＸ線診断、内視鏡診断、治療の実践と診断能力の向上に励み、患者さん個々の状態、癌の性状、進行度に合ったより合理的な手術療法（evidence based medicine)を目指すよう心掛け、minimally invasiveな内視鏡治療から腹腔鏡手術、開腹、開胸による縮小、標準、拡大根治手術へと診療、教育、研究に励んでいる。乳癌部門は都立駒込病院外科部長の冨永　健客員教授を乳癌検診治療センター長に迎え、今後頻度の増加することが予想される乳癌の治療に柱を建てるべく努めている。泌尿器部門が外科内にあることは特に奇異なことではなく、教育においても診療においても（骨盤内臓器の手術、消化器癌との重複癌など）外科と合同で診療する長所を最大限に発揮できるよう努力している。泌尿器科学教室からの外科研修ラウンドでは、どしど

し外科手術に入ってもらい後半には胆摘、腸切除などの術者になってもらっている。



2．研究に関して

研究は消化器癌の病態（発育進展、転移など）と治療に関する臨床的および基礎的研究、腹腔鏡を中心とした先進的外科治療法の確立に向けての研究、免疫、サイトカインを中心とした外科的侵襲学の研究が主たるものである。臨床的研究は外科切除材料を用いた早期癌から進行癌までの消化器癌の発育進展、腹膜、肝転移機構の解析、術前化学療法施行例による癌化学療法の病理組織学的抗腫瘍効果および制癌剤感受性の研究などが行われている。また先進的外科手技として大腸癌の腹腔鏡手術を早くから導入し、安全な手術術式の確立および適応の拡大をめざして症例を蓄積中である。

3．卒後教育について

当外科は歴史の浅い施設であり、中途の学年で入局するケースが多く個々人の過去に受けた教育および将来の希望に沿い卒後教育を進めてきたのが現況であった。最近になりポツポツと臨床研修医の入局も出始め、さらに平成16年の臨床研修必修化に向け毎年２～３名の研修医ラウンドが始まることが決まり、よりきめこまやかな卒後教育カリキュラムを作成中である。必修臨床研修終了後は３年時より研修医を指導しつつ消化器外科の専門カリキュラムの中に入り、以降学会活動にも積極的に参加しテーマを決めて博士論文の準備に着手している。最近では山形健一助手（J Exp Clin Cancer Res 19:211-217, 2000)、田中孝幸助手（J Surg Oncol 75:165-171, 2000)の２名の医学博士が誕生した。なお、当科は外科学会、消化器外科学会、消化器内視鏡学会、消化器病学会、乳癌学会その他の認定指導施設であり、各々認定医、専門医の取得が可能である。

4．医局行事

週間予定は木曜早朝の抄読会、研究会、金曜午後の教授回診、症例検討会、医局会が主たるものであるが、早朝、夕方のミニカンファランス（術後、重症例、画像など）を随時行い病棟医の教育とともに患者情報の全医師への伝達、交流を密にすべく努めている。

地域医療連携、医局員教育の一環として隔月第２木曜に消化器科と共催で地域医師会の先生方も加わり症例検討会を行っている。また、城東地区の３大学附属病院が中心となり年に２回城東外科懇話会を主催し全医局員の参加を促し地域交流に努めている。

5．おわりに

十周年記念誌の当外科紹介では開院当時の苦労話（医局体制の整備）がよく語られているが、当病院の位置する江東区豊洲の地は附属病院開設時、周辺はまだ未開発であり交通の便も悪い状況であった。最近はオフィスビル化、住宅用ビルの増加など変貌をとげており、当施設の立場もより強くなった地域の要望に応えねばならなくなっていると自覚している。近隣の各医師会とも病診連携、病病連携などを通し密な関係を築き上げるべく努力しなければならないと考えている。

（記　熊谷　一秀）